音　楽　科

乗　富　章　子
今　井　直　人
橋　本　俊　彦

1　音楽科における知識創造とは

生活と音楽とのかかわり
ＢＧＭの影響
音楽の潜在的価値

音楽は、私たちの日常のごく身近なところにあって、生活に潤いを与える存在として欠くことのできない価値をもっている。そこには、音楽そのものを積極的に楽しむものだけではなく、BGM（BackGround Music）などによって、思考・感情が大きく影響されるという音楽の潜在的価値も含まれている。

学校教育における音楽（以下、音楽科）は、音楽と直接的にかかわる教科学習を中心にして、様々な音や音楽に出会う場である。子どもは、音や音楽を表現及び鑑賞する活動を通して感受する心を日々育んでいる。その心の発達は、音楽的な技能の意欲向上にも深く結びついており、音楽の潜在的価値と融合することで、生涯学習につながる新たな音楽性として生きるものとなる。

音楽性
音楽を理解し、そのおもしろさや美しさを感じ取ること
音楽的スキーマ
音楽を表現・鑑賞するために必要となる経験と能力

音楽科の活動を進めるためには、子ども一人一人が音楽的スキーマをもち、音楽的な視点で友達と積極的にかかわり、ともに表現することでしか得られない気づきや喜びが大切となる。子どもは、音楽的スキーマの個人差を互いに認め合いながらも、新しい刺激として相互に作用させながら活動することで、個々に音楽的スキーマを培ってきている。

音楽性の高まり

子どもは、音や音楽から感じ取ったことを周囲に伝えるために、きれいや美しいといった漠然とした感想から、音色や旋律のある部分がどのようだという楽曲に即した細かな感想まで、言葉によって多くを表現する。しかし、音楽性は、感じたことを言葉で表す力のほかに、音楽的な感受力や表現の技能、鑑賞の能力も合わせて求めることで高まっていくものである。言葉ではうまく表せないことでも、音楽ならば伝え合うことができるであろう。

音楽科と知識創造

知識創造という視点で音楽科をとらえると、次のように考えることができる。子どもは、新しく音や音楽に出会うことで、音楽的スキーマや生活経験から何かしらの感想を抱くことになる。それを互いに言葉や音楽で伝え合う中で、新たな気づきが生まれてくる。子ども一人一人が音や音楽に対して主体的に向き合い、友達の表現するものを意識して聴き、何かを感じ取ることで、新たな気づきが生まれる。また、その感じ取り方にも個人差があり、互いに表出することを繰り返す中で、音楽性を高めることに結びついている。また、ともに音や音楽を表現する活動は、言葉では伝えることのできない新たな気づきを生み出している。

以上のことから、音楽科における知識創造を以下のように定義する。

音楽科における知識創造の定義

様々な音や音楽に自分なりの感じ方で向き合い　表現や鑑賞の活動を通して　互いにかかわり合う中で　自らの音楽性を高めていく営み

2　音楽科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

(1) 音楽科における「よさ」

音楽科における「よさ」とは、表現や鑑賞の活動を通して、子どもが音や音楽に出会い触れることで、音楽に対する感性が豊かになっていくこと、また豊かになることで音楽を愛好する心情が養われていくことである。そこには、音楽をともに共有することでしか得られない喜びが数多く存在し、この「よさ」を下支えしている。

音楽的な要素
音楽を特徴付けているリズム、旋律、強弱、速度、音色など

音楽活動を進めるにあたっては、基礎的な能力を培っていくことも求められ、何を目的として何に取り組み、どんな活動が目的に近づくことにつながるかを音楽的な要素に即して技能面としてとらえることができる気づきも「よさ」である。

(2) 「よさ」の共有のための手だて

① 可視化

音楽は一瞬の芸術である

楽譜や楽器のような表現するためのツール、あるいは表現する人、鑑賞する人は目に見えて存在するが、音楽そのものは「音楽は一瞬の芸術である」という言

葉があるように、すぐに消えてしまう。そのため、高い評価を感じる表現を聴いても、自分のものとして表現するとなれば容易ではない。また音楽には言葉で表現しきれない部分が多く存在することから、ふりかえりシートなどの文章でまとめることばかりではない。

そこで、子ども一人一人が音楽活動の軌跡を明確につかみ、その繰り返しがプロセスの自覚につながるととらえ、以下のような手だてを講ずる。

身体で聴き表現する
・音や音楽を身体で感じながら聴くことで、拍子感やリズム、強弱などがつかめているかをふりかえる。

楽譜などへの書き込み
・楽譜などのツールに書き込むことで、自分の感じたこと・考えたことを内容やポイントを焦点化する。

ポイントをしぼって聴く
・音色やフレーズなどの音楽的な要素をしぼって聴くことで、どの要素について聴き取る力が定着してきたかがわかる。

録音・録画して再生
・録音・録画をした自らの表現を再生して鑑賞することで、できるようになったことや新たな課題を見つける。

音楽ソフトの活用
・コンピュータ及び音楽ソフトを用いることで、表現した音楽（音程やリズムなど）の正確さの変遷を把握する。

これらの手だてによって表現されたものは、全体または小集団として、また子ども一人一人にとって、可視化することで同時に有意味化される。また、表出されることで同時に評価される部分も含んでいる。そのため、子どもの意欲が向上するような心情面の配慮も大切である。

② 「かかわり」

目標の明確化

表現活動においては、活動を進める前に、自分あるいは自分たちは、どのような表現を目指そうとしているのかを明確にして、それを目標として共有することが必要である。そして、その場のかかわりに終わらず、常に目標に立ち返る視点をもった「かかわり」が大切である。

段階的な活動計画

具体的には、どんな音楽的な要素が音楽を特徴づけているのかに気づき、どのように向上することで目標に近づくことができるのかを、ステップを設定した活動を取り入れることで明らかにしていく。音程やリズムという基本となるものから、フレーズや歌詞といった曲の表情づけまで段階的に取り組ませ、個々の感じ方・考え方の差異を楽譜やメモをもとに焦点化する。また、聴き手を設け、聴くポイントを明確にして聴き取らせ、表現した人にポイントを中心に伝えられるようにする。聴き手には、表情やジェスチャーなど身体をつかって視覚的な聴き方を工夫することで、表現している人にリアルタイムに伝えられるようにする。消えてしまう音楽表現を他者から評価され、価値づけされることはとても大きな意味がある。

感じ方・考え方の差異の焦点化

聴き方の工夫

客観的な評価

分析的な聴き取り

鑑賞活動においては、漠然と聴いた一度目の感想をもとに、その感想がどのような音楽的な要素の影響を受けているのか、友達がなぜ自分と異なる感じ方をしたのかを分析的に聴き取る活動を取り入れる。ときには、おもしろいリズムだと感じたときに挙手したり、音楽に合わせて身体をつかって表現したりという聴き方もあろう。また、二つ以上の表現（または鑑賞曲）を聴きくらべる場を設定し、音楽的な要素に基づいて細かな表現の違いに気づかせる。

音楽性を高めていくためには、音楽に出会って何となく感じた思いを、発達段階に応じて、少しずつ音楽的な裏づけをもって感じ取れるような評価活動が求められる。また、個人差であったり感じ方の違いであったりという様々な要因も考慮しつつ、「かかわり」の中で評価を次の音楽活動に活かしていくことが大切である。

③ 実践的自覚へのデザイン

子ども一人一人が、どうしてそう感じたのかを音楽的な要素に照らし合わせて感じ取ったり発言したりできるようになることが大切である。同時に、音や音楽の美しさやおもしろさなどを味わうことができる心情を育てたい。

音楽を楽しめる環境整備

集団として認め合える授業設計

自らの思いを音楽や言葉で表現するためには、それを表現することができる受け皿が必要である。みんなで音楽を楽しめる環境整備は、素直に音楽に向き合い、音楽を感じ、率直にかかわり合えるために欠かせない。そのため、日ごろから、集団として認め合い、個々の伸長を理解し合える授業設計が求められる。

3　実践例　－６年－

(1) 題材名　すてきなハーモニー

(2) 本題材における知識創造

二部合唱の響きがより美しいものになるように歌い方を考え　表現を高めていこうとする中で　曲のつくりの特徴や響きの美しさやおもしろさを感じ取り　合唱を楽しむ

今日、音楽科の学習では伝統的な音楽、世界各地の音楽からコンピュータミュージックまで様々なジャンル、形態を幅広く取り扱うことになっている。しかしそのような中でも、高学年の学習においては、二部合唱の題材は音楽のつくりや響きの美しさ、おもしろさをつかませるのに中心的かつ効果的な題材であることは確かである。そして多くの場合、その学習では発達段階や経験に応じた音楽的、技術的な要素を考慮し、気分や自然を表現した詞の読み取りや情景の想像なども含めて、二部合唱という形態で歌うことを通じて音楽性を高めていくことを目指している。

子どもが合唱すなわち複数の声部に分かれて歌えるようになるには実際のところ「慣れ」の要素も大きい。しかしその先は、単に何度も歌って慣れるというだけではなく、より美しい響きを求め、そこから合唱のおもしろさや音楽する喜びを感じ取るに至ってほしい。また高学年であれば、音楽を特徴付けている様々な要素や楽曲の構造を、単に楽譜から読み取ることにとどまらず、そういったことを実際の表現活動の中でとらえていくことも学習の方向性の一つであろう。要するに題材とした楽曲を子どもなりに、また教師なりに掘り下げていくことが、自らの音楽性を高めていくという知識創造に結びつくと考えるのである。

本題材では、「野にさく花のように」「風になって」「緑のラララ」の３曲を、選択したグループごとに分かれて合唱に取り組む。先の２曲は教科書教材、「緑のラララ」は今月の歌であるが、どの曲もあまり難易度に差のない似たようなつくりの二部合唱である。合唱の苦手な子や好きな子、なじみの曲の表現をより高めたい子、意欲的に新しい曲に挑戦しようとする子、それぞれが楽譜そのものや他者の表現と向き合い、また聴き合い評価し合う中で合唱のおもしろさを感じ、楽しんでほしいと思う。

(3) 音楽科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

① 本題材におけるよさ

曲を選ぶ段階から一人一人に思いを持たせ、小集団で相互評価や自己評価を取り入れながら、ステップを踏んで練習を進める。その活動の中で曲の音楽的な要素や特徴に気づきながら自らの歌い方やグループでつくる響きがよりよくなっていくという自覚を促す。

② 「よさ」の共有のための手だて

ア　可視化

うまくいかないところやより豊かな表現ができそうなところ、またその曲の特長的な面白さや聴かせどころを、大伸ばしにした楽譜に書き込んだり、付箋紙で貼り付けたりさせる。その際には、感覚的なことばかりに頼らず、強弱、抑揚やブレスといった歌詞と音のかかわり、二つの声部のからみ合いなど、曲の細かな要素に着目させたい。そうして見つけた練習のポイントは、習熟してできるようになることもあれば、練習を重ねるうちに考え方が変わってくることもあるだろう。書き込みや練習の記録はそのようなステップがわかるような形で共有させたい。

上述のように楽譜から自分たちの音楽をつくりあげることは、音楽表現を深めるいわば本筋とも言える手段であるが、一方であまり楽典的な意味ばかりにこだわらせないようにもしたい。それより自分たちの合唱をより美しいものにするための歌い方の工夫や課題、練習の仕方などを個人やグループ間で知らせ合い、また練習過程の歌声を聴き合い、視点を持った練習の意義を実感できるようにしたい。

合唱に取り組む活動におけるプロセスは、本来表現された音や音楽そのものの変容、そして時には表現者や聴き手の表情などからも見取るべきものであり、そのこと自体すでに可視化されたものと言えよう。楽譜の読み取り、感じたことの記述、ふり返りや評価など、書き留められた事柄ばかりに限定せず、よりよい合唱表現を目指すための必然として生まれてくる姿や言葉を大切にして、「よさ」の共有につなげていく。

イ　「かかわり」

３曲の中から歌いたい曲、より表現を深めたい曲を選択してグループ別に練習を進めていくが、曲を選び練習を始める段階で、ある程度学習のゴールを見据えることが必要であろう。つまり、歌おうとする曲が違っても「この曲のこの部分をこんな風に歌えるようになりたい」という音楽

的な課題意識を具体的かつ明確につかむことが重要であり、それらについて話し合ったり書き込みを見合ったりする場面を設定する。

また練習の過程で、互いの響きを聴き合い、相互評価したり教師がアドバイスしたりすることはもちろんであるが、そこで楽曲の違いを超えて曲の見方や練習の仕方などについて、他のグループを参考に自分たちの表現に反映できるようにしていきたい。

このようにグループの歌声そのものだけでなく、自分たちの音楽づくりのプロセス全体を共有できるようにするとともに、評価活動の中でもその視点を取り入れていくようにする。

ウ 実践的自覚へのデザイン

ここでの学習のように楽譜から曲のつくりに着目することや、様々な歌唱教材にふれる中で二部合唱に慣れていくこと、また教科書巻末「音楽のたから箱」の名曲群から優れた合唱曲を鑑賞することなどを積み重ねていくことで、歌うことに喜びを感じるようになってほしいと願っている。

そうして得られる喜びこそ合唱から学んだことの実践的自覚であると考える。日頃の授業はもとより、６年生では連合音楽会や卒業式での発表、また卒業前に自主プランとして企画している音楽会のステージで、美しい響きをつくりあげようとする意識、そして音楽を楽しもうとする心情を具体化して表現する場として位置づけていく。

(4) 学習計画　(総時数８時間)

主な活動と内容	「よさ」の共有に関する手だてと意図
1　３曲のよさや特徴を感じ取りながら主旋律を歌って慣れる ○今月の歌「緑のラララ」を歌おう ・　手拍子が入ると楽しい感じがする ○「野にさく花のように」を歌おう ・　主旋律が下に行く部分もあるんだね ・　強弱の工夫もできそうだ ○「風になって」を歌おう ・　「緑のラララ」と重なったりかけあったりする部分が似ているよ ・　３曲ともさわやかな感じがするよ	可視化　「かかわり」 単に楽しく歌う、歌を覚えるということにとどまらず、自分なりにその曲のどこが好きかを話し合わせたり、完成した二部合唱の響きを想像したりして、これからの学習のスタートとゴールを意識付ける。
2　二部合唱に取り組む曲を選んでグループを作り課題や練習の見通しを持つ ＜曲のよさや特徴を活かして二部合唱をしよう＞ ○合唱にして歌いたい曲を選ぼう ・　歌いやすい「緑のラララ」で美しい表現を目指そう ・　初めて知った曲で合唱にチャレンジしてみよう ○課題を見つけて練習の見通しを立てよう ・　重なった部分の音が取りにくそうだ ・　各パートのバランスも気をつけたい	可視化　「かかわり」 音楽的な内容面から曲の特徴をつかんだり、一人一人が自分の音楽体験をふまえて学習したいことを見つけたりできることが大切である。 こうしてそれぞれが学習課題をつかむ段階で思いを書かせたり話し合わせたりする。またそれらを交流する中で曲の見方や練習の仕方などに他者の視点を取り入れていくようにする。
3　グループごとに合唱の練習を進める ＜うまく歌えない部分や よりよくしたい部分を みんなが明確につかんで　練習しよう＞ ○楽譜に課題を明確にできるように書き入れたり貼り付けたりしよう ・　どうしても音の重なりがきれいに感じられない ・　主旋律が浮かび上がるようにしたい ○それぞれの曲の聴かせどころを意識して練習し歌ったり聴き合ったりしよう ・　かけあいの部分を楽しく表現しよう ・　３度の重なりを正確につかもう	可視化 拡大した楽譜に、書き込んだり付箋紙で貼り付けたりして課題や練習ポイントが明確になるようにさせる。またそれらを加除修正しながら練習を進めるようにする。 「かかわり」 楽譜や書き込みなどは互いのグループが見られるようにしておいて話し合いの材料にもする。 これに中間の聴き合いや話し合いも取り入れて、効率的に、かつ足跡がわかるように合唱の練習を進めていくようにする。
4　グループごとに練習した二部合唱を発表する ＜よりよくなったところを聴き合おう＞ ・　友達の声と重なることが楽しく感じられるようになってきたよ ・　声の出し方だけでなく歌う時の表情から大切だ ・　聴いていて曲のよさがよく伝わってくるよ	可視化　「かかわり」 合唱の響きそのものだけでなく、視点や課題意識を持った練習過程をふり返って書かせたり話し合わせたりする中で、それぞれの音楽表現を認めていくようにする。

(5) 本題材における授業の実際と考察

本題材の中心となる活動は、似たようなつくり、似たようなレベルの３曲の中から自分なりの思いで曲を選択し、一人一人が課題や学習の見通しをしっかりと持ち、同じ曲の選択者グループで練習に取り組む課題別グループ学習である。この学習形態によって、学習のスタートとゴール――曲に対して今自分が持っているイメージや課題、そしてこういう風に歌えるようになりたいという願い――を学習者も教師も少しでも明確につかめるようになることを期待したからである。

以下に、表現された歌声、発言や書かれた思いといった表出された子どもの姿から、本実践における手だての有効性について述べる。まず学習活動の流れに沿って全体的に考察し、あとに抽出児数名の学習の様子に視点を当てて考察する。

① 実際の学習活動の流れから

ア 曲に慣れ課題や見通しを持つ活動で

教材曲とする３曲との出会わせ方については、あえて特別な手だてを打つことなく、自然な形で歌に親しんでいった。「緑のラララ」はちょうど全校で今月の歌として歌っている曲であり、あとの２曲は教科書教材として、あまり表現様式について深入りすることなく何度か範唱を聞いたり歌ってみたりしてふしや曲想をつかんだ。

３曲に慣れてきたころに、「どの曲のどのようなところが好きか」「どの曲をどんな風に歌えるようになりたいか」について意見を交流し合い、付箋紙に、自分がこれから合唱の練習に取り組みたい曲を理由とともに書かせてグループ分けを行った。左（表１）は付箋紙に書かれた曲選びの主な理由である。ある程度予想できたことではあるが、曲の好みははっきりしているものの根拠の具体はあいまいで乏しい。しかしこれを明らかにした上で、「何となく好き」といった思いがより具体的で確固たるものになっていくことこそ音楽づくりのプロセスなのである。このように、いわば各自の学習のスタート地点を可視化させることは大切な手だての一つであると考える。

風になって
- 「おおきなはねを・・・」がとてもひびきがいいから。
- 最後らへんの「小さなふねの・・・」のあときれいにはもりたい。
- テンポが速いところが歌いやすい。
- 繰り返し（出だしのおいかけ）をきれいに歌ってみたいから。
- 下パートと「大きな船のほをふくらませ」というところが好き。
- 輪唱がきれいだから。

野にさく花のように
- ノリが良い。ひびきが良い。
- のんびりしていて好き。歌いやすい。
- 「そんなふうにぼくたちも生きてゆけたらすばらしい」の歌詞が好き。
- ゆっくりできれいな音だから好き。
- 下パートも分かりやすそうで、ぼくでも歌えそう。
- 下のパートがむずかしくて、とてもきれいなのでやってみよう。
- 歌が何となく好き。歌いやすい。
- 合わせる所がきれいで、これをしたい。曲が好き。

緑のラララ
- 追っかけや各パートをもっとくわしく知りたい。２番も好きだしやってみたい。
- 歌の追いかけを勉強したい。好きなところは高くもり上がるところ。
- 手拍子と歌がよくわからないのでこの授業で上手になりたいです。
- メロディが好きで合唱の部分がきれいだからやってみたい。
- 曲の感じ的に他の曲よりも歌いやすかったから。無理せず歌える。
- 最初の所が楽しい感じ。歌っていると楽しくなるから。

表１　付箋紙に書かれた曲選びの理由（重複したものは略）

イ 課題曲ごとにグループ練習をする活動で

このあとの学習では拡大した３曲の楽譜を用意して、継続的に活用できるようにした。そして先に書いた付箋紙をその箇所に貼り付け、さらに、音楽を特徴付ける要素にも着目させながら、練習の過程で見つかった課題や歌い方を工夫したい部分など、グループ内で自由に書き込んでいくようにした（写真１）。

あわせて一人一人には練習記録カードを持たせ、その時間の成果や次の課題といった練習のあしあとがわかるようにした。

写真１　書き込まれていく楽譜

このように、拡大した楽譜でそれぞれの考えを交流する――「かかわり」――、自分の思いを継続的に書き留めていく――可視化――、こういった手だてによって、どうしても感覚的、抽象的であいまいな言葉で表現されがちな音楽に対する感受性や課題意識を確かな形で共有できるようにした。

１０人以下のグループに分かれての実際の練習場面では、教科書を手にしながらも大きな楽譜を前に自然と話が弾むようになり、自然な形で誰となくリーダーシップをとって書き込みを進めていく姿が見られるようになった。

その書き込みも、最初は音がとりにくいところ、揃

わないところといった練習の必要な箇所のチェックが中心であったが（写真２）、それに加えて、「ここをこう表現しよう」といった思いの書き込みも見られるようになってきた。また、もともと楽譜に記されているのにあまり気に留めていなかった強弱記号などにも子どもが自ら注目するようになったことも興味深いことである。こうした活動は、言わば、可視化されたものを表現し、表現しようとする思いを可視化する、その往復の作業が進められている状態であると考える。

さて、うまく歌えないところやよりよくできそうなところを課題として設定し練習するのは必然であるが、曲そのものを見つめ直し、そこから練習課題を見つけることも音楽をつくっていく上で大切なことである。題材の読み取りが表現の変容につながっていくというプロセスが期待されるからである。そこである段階で、その曲の聴かせどころを考え、焦点化して練習する場面を設定した。

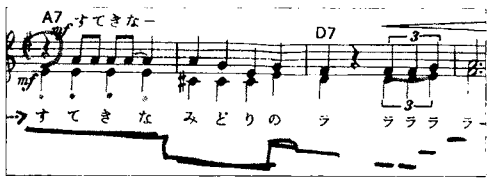


写真２　ふしを視覚でつかもうとする工夫

「その曲の聴かせどころの歌い方を考えよう」という教師の投げかけに対して、ほとんどの子がすぐさま楽譜に着目し、まず３曲それぞれの聴かせどころはどこかという視点でいろいろと意見が交わされた。

「♪*ときには暗い人生も*･･･後半の２パートに分かれるところ」
「♪*知るのです*･･･最後*のところ*」（野に咲く花のように）

「楽譜の３段目からじゃないかな」
「ラララじゃない？ 追っかけの部分」
「♪*おひさま*ーからずっとだと思う」（緑のラララ）

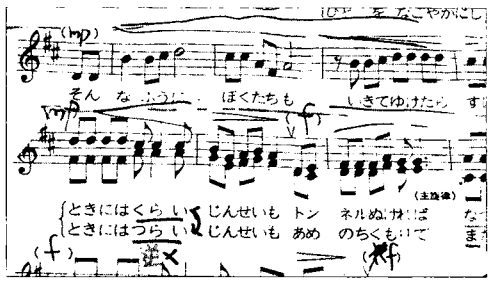


写真３　聴かせどころの強弱を工夫

上記２曲は前半はユニゾンであり、２声に分かれる後半を聴かせどころと考えるのはある意味自然なことであるが（写真３）、「風になって」は曲の冒頭から２声のエコーになっていて、子どもなりに解釈が分かれた。曲の後段を「サビ」として「サビの部分が聴かせどころだよ」という意見と「曲の前半、追いかけて歌う部分が特徴的だよ」という意見であるが、音楽的にはどちらも曲のつくりの大切な要素を指摘しているのである。音程を正確につかみにくいという理由で主に後段の練習に時間を割いていたこのグループが、それまでさらっと歌っていた前半部分にも注目し出したように、グループごとに視点を持って楽譜を読み取るうちに、互いの感じ方を交流し合い、曲のよさやおもしろさを見つけていったのである。右の写真４は、曲の後半に同型のフレーズが４回現れることに着目し、盛り上がりを意識した強弱が書き込まれている部分である。

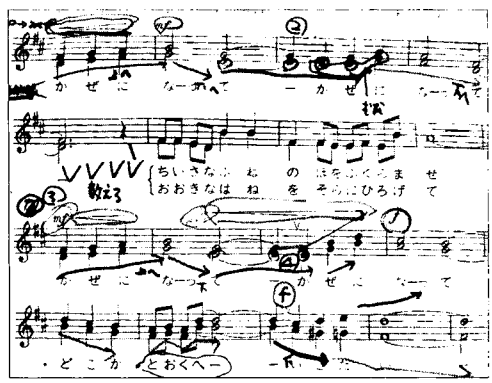


写真４　曲のつくりに着目して強弱を工夫

合唱の練習に限らず、子どもは与えられた時間を漫然とした繰り返し練習に使ってしまいがちであるが、このようなグループ練習を進めていくうち、部分の取り出し練習など、課題意識を明確にした練習もできるようになってきた。またグループ内でさらに分かれてのパート練習や聴き合いなど、練習形態の工夫もできるようになってきた。

その結果として比較的短い練習期間ではあったが、できないところができるようになった、曲のつくりのおもしろさがわかったなどといった理由で、歌声に自信が感じられ、響きも少しずつ整ったものになってきた。これは「かかわり」――ここでは他者とのかかわり、曲そのものとのかかわりの両方――が音楽づくりに効果的に機能している状態であると考える。

ウ　二部合唱を発表し聴き合う活動で

練習の仕方や表現の工夫などを話し合って楽譜に書き込んだり、練習記録カードにその時間をふり返って書いたりすることは、手だてとしての可視化や「かかわり」の主たる形である。しかし表現活動である以上、その実際の響きとその瞬間の子どもの姿を見取ることこそ大切にしなければならない。

そこで練習の中間に一度、そして練習のまとめとして最後に一度、グループ合唱の発表の場を設定して、互いの歌声を聴き合った（写真５）。単に相互評価し合うだけに終わらせず、他のグループの響き、あるいは練習の仕方や表現の工夫を、自分たちの表現にどう活かすことができるが重要なポイントである。

表２は子どもの発言や練習記録カードに見られた気づきの例であり、可視化された音楽表現からつかんだことを言葉の形で可視化したものと言うこともできよう。

歌い方そのものについて気づいたこと ・地声でなく高い音も女子の声にあわせて歌っていたので参考になった。 ・下パートは声が大きすぎたらダメ。 ・下は必ずしも小さくなくていい。 ・声を一人で大きくするのは×。 **視覚的にわかったこと** ・タイミングを合わせたり、おたがいを見合ったりしていた。 ・※※君の口のあけ方がとてもよかった。 **音楽的な表現のスタイルについて気づいたこと** ・風になってのグループから強弱を学んだよ。先生方からの感想を聞きたい。 ・もう一つの「野に咲く花のように」のグループから、もう少しやわらかく歌うと、この歌に合うと学べました。 ・僕たちはテンポが速かったけど他の班はフワッとした感じでよかった。だから軽い感じで歌うようにしてみたい。 ・曲に合わせた歌い方をしていました（やわらかさなど）。

表２　友だちや他のグループから学べたこと

写真５　グループ発表の聴き合い

表２では便宜上３観点に分けて記載したが、いずれも他者の表現を評価するだけにとどまらず、自らの表現に反映させようとする姿勢につながる見方となっている。

例えば、下のパートが「大きすぎたらダメ」と「小さくなくていい」と相反するような記述を紹介したが、これは対立したものではなく、バランスを考えなければならないという落としどころを示しているのである。仮に意見の相違だとしても、そこで試行錯誤を重ねて表現をつくりあげていくことこそまさに「よさ」の共有であると考える。ちなみにこの声量のバランスについて言うと、他のグループの発表を参考にして、パート間でメンバーを移動したり、意識することをあらためて楽譜に書き込んだり姿がどのグループでも見られた。何よりも教師が「もっと声を出そうよ」と言わなくても声を出すようになったことは現実的な成果である。

またグループ内の並び方なども、どのように並んで、どのように合図や息づかいを合わせたらよいかを、教師の指導や助言によってではなく、実際の友だちの表現から学ぼうとしている姿が目立った。そしてそのことを言葉にして意識付け、次の自分たちの練習に活かすというプロセスが、実際に合唱の練習をする中でできあがっていくのである。

② 抽出児の姿から

前項では、手だてとしての可視化――書き留めた言葉と音楽表現そのもの――と「かかわり」――他者とのかかわりと楽曲とのかかわり――について、学習の流れに沿って考察したが、この項では何人かの抽出児を例にとって、その練習に取り組む姿やカード（写真６）の記述に見られる変容からそれらの手だての有効性を考察する。

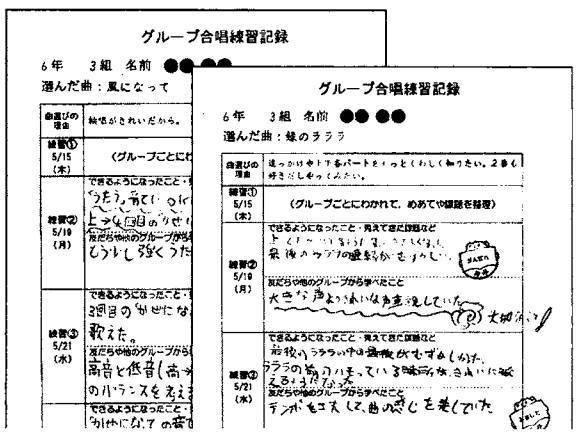


写真６　練習記録カード

ア　A児／「緑のララララ」を選択（男子）

A児と次のB児は共に「緑のララララ」を選択したグループのメンバーである。A児はグループでただ一人の男子であるが、楽譜の読み取りも含めて練習に興味や意欲を持って取り組み、実際に積極的、中心的に拡大楽譜に書き込んだり、話し合いを進めたりしていった。

次のチャート図は、何をしたいか、どこができるようになったか、どこがもっとよくできそうかを書かせた練習記録カードの一連の記述である。こうした可視化によって、A児自身やそのグループの課題意識がより確かなものになり、また練習の成果も実感が得られたようであった。

<曲選び>
追っかけや上下各パートをもっとくわしく知りたい。2番も好きだしやってみたい。

→

<練習１>
上と下がハモるようになってきてよくなった。最後のララララの連続がむずかしい。

→

<練習２>
最後のララララの中の最後が難しかった。ララララの前のハモっている所がきれいに歌えるようになった。

→

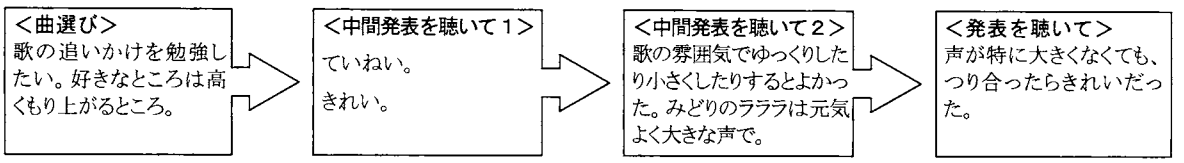
<練習３・発表>
上と下しっかりきれいに重なっていてよかった。

イ　B児／「緑のララララ」を選択（女子）

A児と同じグループである。B児は音楽が好きで、声もよく出る方であるが、その歌い方はよく言えば自然で楽しさ優先、言い換えれば少しでも美しい響きを求めようとする意識はあまり高いようには思えなかった。

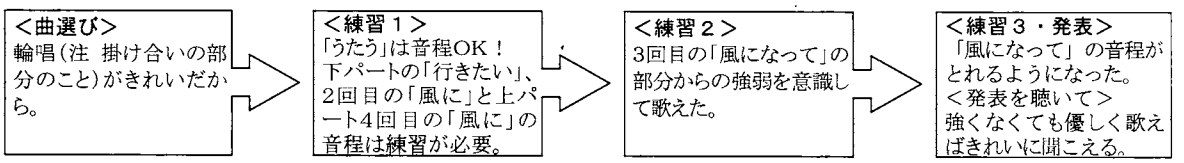
カードの記述の中から他のグループの表現から学んだことを書き出すと次のようになる。掛け

合いや終結の盛り上がりを練習してしっかり歌えるようになりたいと選曲したようであるが、他のグループの様々な歌い方や練習の仕方に出会い、また同じグループのメンバーと話し合う、まさに「かかわり」の中で、より音楽的な見方、聴き方ができるようになったことがわかる。



ウ　Ｄ児／「風になって」を選択（女子）

おとなしく控えめなＤ児は積極的な挙手や発言は少なく、歌やリコーダーも一人で演奏するのはとても苦手である。しかし真面目で音楽好きのＤ児は、教師の投げかけや友だちの発言にもすばやく反応し、楽譜を確認したり、それに書き込んだりする姿がよく見られた。またグループ活動の中では、キーボードでの伴奏を引き受けたり友だちと表現方法について対立する意見を述べたりと、いろいろな角度から他者とかかわり、表現を練り上げていこうとする姿勢が練習を重ねるごとに目立ってきたのである。そのいきいきとした姿勢と具体的かつ的確な練習記録から見取ることができるＤ児の課題意識や達成感は、可視化や「かかわり」の有効性を示すものと言える。



(6) 題材を終えて

① 子どもの姿から

音楽科における知識創造の定義――様々な音や音楽に自分なりの感じ方で向き合い、表現や鑑賞の活動を通じて、互いにかかわりあう中で自らの音楽性を高めていく営み――は、端的に言えば、他者とかかわりながらも自分なりの表現をめざす、つくるというプロセスにほかならない。この題材全体を通してみても、他グループの表現に感受性を揺さぶられたり、うまく歌えなかったところが解決できた喜びを感じたりするうちに、音楽の時間や合唱の練習を楽しみにする姿が次第に目立ってきた。最終のグループ発表は担任の先生にも聴いてもらおうと、自分たちから音楽室に招いたほどである

もちろんこの実践の主眼は、単に「○○さんたちの歌い方がいいなあ」「つられずに歌えるようになった」「きれいな響きになってきた」といったレベルにとどめず、そのように感受したことを積極的に表出し合い、書き留めていくことの積み重ねを、表現の高まりに結び付けていくことにあった。その意味では、グループでの練習の様子、表現の工夫や練習のねらいが書き込まれた楽譜、抽出児の姿や練習記録カードの記述は、まさに知識創造のプロセスそのものとも言えよう。

そして感受したことの可視化――言葉、あるいは音楽表現そのもの――や「かかわり」が学びをより確かなものとし、音楽を楽しむ心情につながっていく。この姿こそ、本実践例における「プロセスの自覚」の具体であると考える。

② 今後の課題

本実践を終えて課題として感じたことを２点記す。

まず、子どもの音楽性を長期的な目で育てていくための実践的自覚へのデザインが、この題材では直接的に活かせなかったことである。ただしこの題材は、そもそも扱った３曲を学ぶことではなく、その学び方を通じて音楽性の向上に結び付けようというものである。

これからの音楽の授業はもとより、秋の音楽会や卒業発表会などで実践的自覚を確かなものにできるよう、本実践での研究内容を活かしていきたい。

もう一つは感受したことの言語化の問題である。例えば「聴かせどころはどこだろう」という問いかけに対し、「曲のヤマ」「サビ」などと答えが返ってくることがあった。しかし続けてヤマやサビとはどういう部分かと尋ねても、的確に、少なくとも音楽的な言葉の言い回しで説明できないのである。他グループの発表を聴いたあとも「きれいにハモっている」といったように、実はあいまいな表現で済ませてしまっている子どもも多い。鑑賞教材を聴いたあとで「きれい」「すごい」ですませてしまうのと同じである。

この問題は、新学習指導要領の音楽でも大きくクローズアップされている点であり、この実践の範疇を超えた課題である。だからこそ、この実践のように、感じたことや言いたいことを音楽的な言い回しで言語化させるような活動を取り入れていかなければならないと考える。